

地域を担う人々(2)

——清沢清志論

腰原哲朗

メセナ

地域文化が進展するには、地方文人の存在が欠かせない。それなりの人なくして文化はありえないからだ。それなりの人としてパトロンの存在がある。

時代は動いて、パトロンも個人から企業メセナなどに移りつつある。「メセナ」という語はローマ時代に、芸術家に厚遇を与えた名門の貴族の名前に由来するらしい。アメリカではメセナよりもっと広い公益事業、社会奉仕を意味する「フィランソロピー」という言葉がつかわれているという。(高階秀爾『芸術のパトロンたち』)資本主義社会での鎮静剤の役割を担う、といった見方をするまえに具体例にあたってみたいと思う。

文化も経済という土台、下部構造の影響をうけることは確かだ、大町市のヘンリー・ミラー美術館の閉館が報じられた。エネルギーに満ちた名作「北回帰線」のセクシーな小説のように、あるいはサイトウ・キネン音楽祭のようにコトがはこばなかった。それでも長野県内の豊富すぎる美術博物館などは半官半民といった形態も

多くて、なんとか存在している。須坂メセナホールでも様々な催しがあり、長野市ではカシヨ情報グループの支援で、東栄蔵氏の尽力により教養講座がすでに二〇〇回以上も実践されている。

ダダイズム

ここで提起するのは穂高町の清沢清志家である。清沢清志一九〇五(明三八)―一九五九(昭三四)東穂高村の製糸業を営む家に生まれる。松本商業学校を中退して上京、青山学院に学ぶ(『長野県歴史人物大事典』郷土出版社)などと私は記した。在京中から、ダダイストらと親しくなっていた清沢は「吉行エイスケと文通を介して知友となり、ダダイズム誌『売恥醜文』を発行」(清沢稔『長野県文学全集』詩歌編?)というわけである。

この「売恥醜文」という雑誌、表題のとおりエロ・グロ・ナンセンスの典型で、引用できるようなシロモノではない。かなり下品なドギツイ表現で彩られている。伝統美や常識に無理して反逆する情熱に性急で、破壊一点ばりである。そうした内容、体裁のせいか、

吉行エイスケ個人の三号雑誌的性格のせいか『日本近代文学大事典』からも除外されている。同時期に生家の岡山から出した同類の「ダダイズム」も同じくとりあげられていない。

しかし発行人を、明治期以来の出版法により年齢が達していた清沢貞夫人に託して出した「売恥醜文」は、文学史の上で逸するわけにいかない。関東大震災の衝撃、階級運動のうねり、唯美派の反ばつといった時代の空気を感覚的に敏感にうけとめた痕跡をのこす一資料だからである。

この資料的価値に言及した中野嘉一の名著『前衛詩運動史の研究』で、ダダの古城として紹介もされ、ひろく注目されることになった。

その後、清沢邸は、いわば安曇野のサロンともいうべき文化発信地となり、辻潤をはじめ文学関係者が集うことになった。竹内てるよもその一人である。

アナーキスト

穂高町の清沢清志宅に滞在して世話になった竹内てるよ女史が逝った。「日本古書通信」に「詩人・本名照代 二月四日死去 九十六歳。戦前にアナキズム詩人として活躍。児童文学でも活躍した。詩集「叛く」自伝小説「海のオルゴール」などがある」と出ていてびっくりした。高齢だったからだ。

長寿の時代だから驚くことはないが、女史は脊椎カリエスの身であり、離婚、貧困に耐えて雑文業で生きたから、私は疾のむかしに亡くなったものと思っていた。それにあちこちから送られてくる古

書目録に、竹内てるよ詩集が多く目につき、私の思いこみをいっそう強いものにした。

出版社や印刷所の経営にもかかわったから、じつに多くの本を出しているが、生活の糧になるはずもなく各地を転々とした。そうした環境のためか、人生詩が多い。

最後の日

家風に合はないといふ離婚受領書が

私のふところにあつたとき

ふるえる両手もて何も知らぬ坊やを抱き

声をあげて私は泣いた

許してよ坊や

偽をつけなくて母さんは出てゆく

来るべき暴風の中にお前をすてて

(『叛く』昭5 の一節)

病苦と貧困、愛児との離別の悲しみを激情をこめてうたう。これらの作はのちの『生命の歌』(第一書房、昭16)にも再録する。『叛く』が草野心平の詩社から謄写印刷で出たのにくらべ、これは詩書の大御所、長谷川巳之吉の第一書房から出たのだから、女流詩人として評価が高まったことになる。わかりやすい、こうした人生をうたう『生命の歌』は終戦直後にも定本として甲陽書房からも刊行された。花々に心情をたくした女性らしい作やエッセイを収める。

別の機会に恵まれれば、あるいは第二の林芙美子『放浪記』となつたかもしれない。林芙美子は詩集『蒼馬を見たり』から流行作家へと転身したが、竹内てるよは詩人に徹した。そのため戦後、穂高

町の清沢家へ身を寄せることになる。

それより前、木崎湖畔の歌人、傘木次郎宅へ疎開していて、清沢宅へは敗戦の前の日にたどりついたのだと大町市の詩人、北沢勝二「ぼくの銀河——清沢清志をめぐって」という冊子は記す。この辺の事情は、清沢清志の「秋風箋」（信越放送で放送したもので、西穂高詩歌同好会の「のろし」に掲載されたという。私がここに引用するのは、それを再録してある細川基個人志「駄」（第3号）からである。

それによると竹内てるよは世田谷から八月十四日大町の疎開地へ急いだが、「ただただ心細かったのでしょう」穂高で下車し、一月程滞在し、また世田谷のお宅へ帰って行った。「それ以来、この詩人は夏がめぐって来る毎に訪れる」ことになったと「駄」は記す。

立派なのは、疎開にまつわる文学仲間の友情にもまして、竹内女史の滞在をみとめた清沢貞夫人のおおらかさである。

かねてより貞夫人は「売恥醜文」の発行に協力し、その関係で吉行あぐりの来駕に応じ、夫清志の演劇活動や、主宰した「藤村会」の来客の応待に力をつくしてきた。

清志の演劇への志向は、松商を中退して（そのため同窓会卒業者名簿には名前がない）青山学院へ進んだ在京時代に発するらしい。在京中、吉行エイスケはじめ東郷青児、団伊久磨らと接し、芸術の香をふんだんに浴びた。とりわけ大正期に潮流をなした「種時く人」グループとの接触が大きいと思われる。

「種時く人」へは長野県関係者も吉江喬松、藤森成吉らが寄稿した。中村屋が支援したハシカで盲目となったロシアの詩人エロシエンコにも接したようだ。以上は柳沢さつき主宰「かおす」96号、

「ダダの牙城」によっている。

この辺の情況については——平凡な文学史をしのぐ名著『雨雀自傳』（秋田雨雀の娘婿はロシア文学者で上田市で育った上田進）とか、エスペランティストでシベリヤに連行された高杉一郎『エロシエンコ』、あるいは松商出身でプロレタリア文学研究ほかで業績のある日大名誉教授の布野栄一「種時く人」の社会主義・反戦平和の論考、あるいは柳瀬正夢の軌跡を記した井出孫六『ねじ釘の如く』など一連の書にくわしいので略す——が、ようするに清志のなかで「売恥醜文」を発行すると同時に穂高演協を発足させた時代背景を想起したい。一九二〇年代の前衛芸術の空気は、こうして安曇野にもたらされた。この「種時く人」のメンバーの一人に後述する津田光造もいて、清沢邸に宿泊（大13）することになる。

ところで演劇は、素人の愛好家が集まって村の小学校などで練習し、経営していた製糸工場の従業員が鑑賞した。こうした動きは白樺派の塩尻市で発行された「地上」に理解をしめし、製糸工女たちに音楽鑑賞の機会をもたらした今井久雄に共通するが、清志の場合は戦後もつづけられるほど熱を入れた活動だった。

演劇の一方で「藤村会」という地味な読書研究会も開いた。そのようすは清沢稔編『藤村会報・復刻版』にある「馬籠行」といった文や、藤村から寄せられた一節を碑にした「詞碑建立記念誌」にみるができる。

このほか清志は英語の啓蒙にも尽力した。こうした文化活動により、開戦の翌朝、治安維持法を適用され検挙されることになる。さらに四二歳でエロシエンコと同じ失明に見舞われる。

しかし西村伊作の「文化学院」で自由な教育に接した娘、清沢ま

り女史が母親文庫などで活動し、穂高文化を継承していく。その一端は清沢稔編のまり女史遺文「かげろうの遺文」という美しい冊子にうかがえる。

さてもう一人、清沢邸に來た津田光造にふれたい。

津田光造

津田光造の長篇小説『僧房の黎明』(昭6刊)は、表題のように日蓮宗の寺が舞台で、三人の弟子たちの思想と行動をとおして、作者の真情を披れきした作品である。「緒言」で、いきなり次のように言う。

昭和維新の時代が來た、此の昭和維新の問題は、等しく外来文明であるマルクス派の共産主義文明、第三インターナショナルを採用するか。排撃するか、それを活かすか、殺すかの葛藤に懸って居る。

このようにパニックをうけた当時の状況を真正面にすえて、この緒言(昭5)を記した。作者はつづけて、科学と宗教との確執をテーマとするといい、「ユダヤ的なマルキシズムでない、第三インターナショナルでない日本的な或は東洋的なインターナショナル即ち第四インターナショナルが生れなければならぬ」と主張する。

こうしたモチーフを代弁する弟子の一人は、寺を出て無産運動にとびこむ。ただし党と距離をおき貧困の暮らし、組合活動の老闘士の食堂宅に住み、売文稼業でしのぐ。ブルジョア雑誌に原稿を売る

矛盾を解消しようと、同人誌を計画、流行作家の色紙や支援で資金を作る。アナ・ボル論争のなか発禁、検束にあい、雑誌は組織化をめざし政治色を濃くしていく。いわば作者の分身、主人公として描かれる。

もう一人の寺を出た弟子は、他の寺の住職となり、カルチャー講座を開き、貧民救済というので、銀行経営の資産家の支援で活動する。信をモットーとする実践家である。しかし恐慌により支援は打ち切りとなり、救済はママゴトじみた閑人の遊戯、といった批判もあり行き場を失なう。

もう一人は舞台となっている上人の長男であるが、これは僧は性にあわないと寺を出て、映画俳優になっってしまう。日蓮上人の映画に出演させ、經典の權威を否定し、偶像化を批判する。宗教は阿片なりとは実に天才的な宗教の定義であると、「共産党宣言」を微妙なイロニーで示す。映画では親鸞の偶像化、經典の絶対化、闘争主義の批判を展開するスジガキだ。すなわち経とマルクス主義文献を二重映しにして、教条主義によりかからない第四インターナショナルをとなえる「緒言」につなげる点で、作者の思想を代弁する。

こうして寺を脱出した三人の若い弟子たちは、それぞれの道へ進むのだが、現実社会の矛盾を克服しきれない。恐慌による破産、選挙資金に対する不信、慈善事業は偽善ではないかという迷い、紡績工場のストの敗北、ハウスキーパーを思わせる異性ジェンダー問題が山積みし、身動きできない。

左翼小児病、ルンペンプロレタリア、労資協調主義、フラクシオン——こういう表現も散りばめられていて、昭和初期の思潮、社会状況がトータルにとらえられている。そうした状況下で、この小

説は次のように結ばれる。

本当の宗教といふものは、阿片ではなく、慈悲の弾力である。マルキシズムそのものが弾力の一つの現れに外ならぬ。もし弾力を否定すれば、マルキシズムそのものが否定されねばならぬだろう。(中略)「弾力の宗教」それは第三インターナショナルの闇の帳りを破る黎明の光りである。日本からの、東洋からの「第四インターナショナル」の大きな使命が孕まれてゐた。(終)

この小説から垣間みえる津田光造は、仏教への関心の強さ、硬直化しやすい組織ナップなどへの批判、理論派と闘争派双方への迷いながらのエール、といったところであろうか。

このように清沢家は安曇野のメセナとして、一九三〇年代の思潮を集約し、啓蒙活動する地点の一つとなっていた。